TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

Bataille, Alone —— Philippe Sollers and Georges Bataille ——

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 尚之 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2633

Journal of the Tokyo University of Marine Science and Technology, Vol. 19, pp. 52-62, 2023

［資料］

バタイユ、ひとりきりの
――フィリップ・ソレルスとジョルジュ・バタイユ――

小山尚之

（Accepted November 21, 2022）

Bataille, Alone
――Philippe Sollers and Georges Bataille――

Naoyuki KOYAMA

Abstract: This article is a translation into Japanese of « Bataille, seul : Entretien avec Stéphane Massonet pour la revue Europe » and gives a small comment about it. According to Sollers, all works of Bataille, including his theory about eroticism, death, sacrifice, laugh and expenditure, prove "the practice of joy in front of death". Sollers estimates negatively the influences of Kojève and Blanchot on the thoughts of Bataille, for the latter was an anti-fascist and anti-totalitarian before the Second World War. If it is just that Hegel qualified the French Revolution as a "maintaining of the work of death", then the writings of Bataille are also "maitaining of the work of death" and would be qualified as revolutionary. Sollers describes emotionally the handshake between Breton and Bataille in the last year of the latter.

Key words: Philippe Sollers, Georges Bataille, Hegel

はじめに

本稿は 2021 年春号の雑誌『ランフィニ』誌第 147 号に掲載された「バタイユ、ひとりきりの：雑誌『ウーロップ』誌のステファヌ・マソネとフィリップ・ソレルスとの対談」[1]を翻訳しそれにコメントを付したものである。対談自体は2020年3月11日になされている。ソレルスは1962年『テル・ケル』誌第 10 号にバタイユの「非・知についての講演」[2]を掲載して以来、つねにバタイユのテクストと積極的に関わっている。現に同『ランフィニ』第 147 号には、バタイユからイザベル・ヴァルトベルクに宛てられた未発表の日付のない手紙 3 通が、親族の了承のもとに発表されている [3]。イザベル・ヴァルトベルクはパトリック・ヴァルトベルクの妻であり、バタイユとは秘密結社アセファルの時代に知り合ったようだ。けれどもこの論考の主題は彼らの秘められた愛ではない。バタイユと長く関わり続けてきているソレルスのバタイユ論が主眼である。

[1] Philippe Sollers, «Bataille, seul», dans *L'Infini*, n°147, 2021, pp.17-25.
[2] 清水徹・出口裕弘編『バタイユの世界』青土社、1991 年、「講演 非−知について」渡辺守章訳、pp.573-610 を参照せよ。
[3] Georges Bataille, «Trois lettres à Isabelle Waldberg», dans L'Infini, n°147, pp.65-77.

バタイユ、ひとりきりの
――雑誌『ウーロップ』誌のためのステファヌ・マソネとの対談――

ステファヌ・マソネ（ Stéphane Massonet 以下 **S. M.** と略す）：あなたはどのようにしてジョルジュ・バタイユと出会ったのですか？　最初に彼のどのテクストを読んだのですか？

フィリップ・ソレルス（ Philippe Sollers 以下 **P. S.** と略す）：いくつかの出来事があります。最初の出来事は 17 歳の私が書店で初めてバタイユを発見したことです。ちょうどその書店は一冊の本を安売りしているところで、その本は床にころがっていました。表紙はジョルジュ・バタイユの『内的体験』と読めました。著者がどんな人物なのか何の考えも持っていませんでしたが、本の書名が私をとらえます。なぜならそのとき私はマルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の全巻をとても集中して読んでいるところで、『内的体験』には『失われた時を求めて』についての長い分析があったからです。ですからこの著者はとて

* Department of Marine Policy and Culture, Tokyo University of Marine Science and Technology(TUMSAT), 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

も不思議だな、と思います。

二つ目の出来事です。私は海辺にいます。私はラスコーの洞窟に関する一冊の本を手にしています。私のいる地方からラスコーは遠くなかったからです。私はこの本を開きます。真の啓示に出会います。同時にその著者に強く魅了されます。私はこの著者をすでに少し知っていましたが、充分にではありません。一も二もなく翌日になるや私は車に乗り、ラスコーに向かいます。当時はもともとの洞窟の中に入ることができたのです。そこで私はとてつもない感動を覚えます。

三番目の出来事です。ある種の人たちはマネに「近代絵画の誕生」というレッテルを施そうとしました。しかし何という誤りでしょう。マネは非常に大きな絵画作品と同じようなことをしようとしていたのです。『オランピア』を嘲笑しようとパリにあらゆる人々が集まりました。ヴェネチアの展覧会でティツィアーノとマネが並んで展示されるようになるには、つい最近になるまで待たねばなりませんでした。たとえ再発見の仕事はつねにやり直されるべきだとしても、時間の経過とともにすべては多少ともあるべき場所に置き直されています。しかし『内的体験』を書いたフランス人のある誰かが、ラスコーからマネにいたる時間の重要性を同時に見定めることができるとは、いったいそれは誰なのか？

続いて私がバタイユの小説に親しむ必要がありました。バタイユの小説群にあてられた一巻のプレイアード版が存在することになるのは彼の死後 40 年経ってやっとのことなのはご存知ですよね。バタイユの小説といえば『マダム・エドヴァルダ』がありますが、とりわけ注目すべきなのは、おびただしい加筆のなされた『わが母』というタイトルの本です。ここでは近親相姦という超タブー視されている問題が極めて生々しく扱われています。そしてもちろん『呪われた部分』があります。これは当時としては並外れた仕事となっています。まったく驚くべき本です。これらの糸を同時に操るにはどんな人間であらねばならないのか？　そこで私は彼のすべての著作を読み始めるのです。そしてガリマール社の『バタイユ全集』12 巻となるわけです。今や好きなように彼のテクストをそれで参照することができます。私は大抵の場合は 1 冊の本を引っ張り出して、あれこれの条を読み直していますがね。

[4]**S. M.**：それでは『マダム・エドヴァルダ』を取りあげましょう。どういった理由で冒頭の引用句 [5]がヘーゲルの言辞であるのか私に説明していただけますか？　憶えておいでですよね、「死はこの世にあるもののうちでもっとも恐ろしいものである。死の仕事を維持するのはもっとも大きな力を要求するものである」。La mort est ce qu'il y a de plus terrible, et maintenir l'œuvre de la mort est ce qui demande la plus grande force.[6]

Ph. S.：ひとつの仮定をしてみることができます。ヘーゲルを、フランス革命を行ったフランス人よりもはるかに深くフランス革命を理解した唯一のドイツ人哲学者としてイメージしてみてください。フランス人は革命のことを真に徹底的に思考しなかったのです。このことはその後多くの分断をもたらすことになるでしょう。こんにちフランス人がグローバリゼーションとかかわって溶解してしまっていることも含まれます。革命を行うことと革命を思考することは全く同じではないのです。『マダム・エドヴァルダ』はヘーゲルの引用句とともにある。特別な郵便で『マダム・エドヴァルダ』を受けとるヘーゲルを想像してみてください。あなたは傑作を手にしています。この本についてひとは非常に思い違いをしていると私は思います。確かに死は、女性のヒステリーというこの上なく異常な形のもとに描かれています。ヒステリーとは再発見しなければならなかった何かです。サルペトリエール病院のインターンだった頃、フロイトは師のシャルコーがヒステリーの女性たちを公開するさまを見ていました。彼女たちはあらゆる方向に身を捩っていました。しかし彼女たちは今ではそんなことをもうしません。より秘められたやりかたでそうしますが、あんな風に自分を見せびらかすことによってではありません。『芸術における悪魔憑きたち』はシャルコーの本です。悪魔憑きたち、いいでしょう。『マダム・エドヴァルダ』ではひじょうに驚くべきことに、冒頭から、「スファンクス」というバタイユの通っていた売春宿に彼が向

[4] この段落は *L'infini* 誌の原文では S. M.氏の発言となっていない。しかし文意から考えればどうみても S. M.氏の発言だと思われるので、筆者の判断で S. M.氏の発言とした。

[5] バタイユは 1956 年の Jean-Jacques Pauvert 版にみずからの名前で序文を付し、その冒頭にヘーゲルからの引用を掲げている。『マダム・エドワルダ』の序文は阿部静子訳、月曜社、2022 年の『マダム・エドワルダ』に訳出されている。角川文庫の生田耕作訳、光文社古典新訳文庫の中条省平訳には訳載されていない。

[6] ドイツ語の原文は次の通り。«Der Tod, wenn wir jene Unwirklichkeit so nennen wollen, ist das Furchtbarste, und das Tode festzuhalten das, was die größte Kraft erfodert.», G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1987, p.32. 金子武蔵訳ではこうなっている。「かかる非現実態を我々は死と呼ぼうと思うが、もしそうしてよいのなら、次のように言うことができる。死とは最も恐ろしいものであり、死せるものを見すえるのは最大の力を要することである。」（ヘーゲル『精神の現象学』上巻、岩波書店、1971 年、p.31）。非現実態云々のところはバタイユの引用しているフランス語訳にはない。maintenir l'œuvre de la mort を阿部静子氏は「死の業を保つこと」（前掲書、p.13）と訳されているが、筆者はソレルスがフランス革命やロベスピエールに言及していることから勘案して「死の仕事を維持する」とあえて訳した。

かう途中で、勃起しながら歩くシーンがあります。売春宿の常連であったというのは事実でしょうけれど、そこで起こったことを語るというのは誰にでもよくあることではありません。バルセロナの売春宿の偉大な卒業生がピカソです。あえて言えば彼はその場で卒業免状をもらった（笑い）。ともかく、見事なヒステリーの発作。ただ身を捩っているだけなのにまるでオルガスムスに達しているかのような。このヒステリーがそうしたことがらについてわれわれを惑わせることはありません。ところで私の興味を惹く事実がひとつあります。それはブランショがバタイユに影響を及ぼしたと信じているそのやりかたです。バタイユの書簡集が存在しますが、そこにはブランショ宛ての手紙は一通も無いのです。驚くべき欠落です。誤ってそう言われているように、バタイユとブランショの間には親密さと友情が存在したのでしょうか？　政治も含めてですが、この件では何が何を覆っているのでしょう？　戦前のブランショがどんな政治路線に立っていたかを知らしめたのは私が最初です。一方のバタイユは『アセファル』にたずさわり、有効な反ファシズム運動、それも急進的なものを立ち上げようとしています。この二つの生涯はまったく異なるものです。ついでにバタイユのニーチェにたいする異常なほどの忠実さに言及することも可能でしょう。バタイユが忠実なのは二人います。ひとりはサド。しかしバタイユはサドに感動することをあなたに禁じます。問題なのはそんなことではないからです。もしあなたがサドに感動するなどと口に出して言ったなら、あなたは恥ずかしいと思うべきなのです。それでも私はアクロバットをやってのけました。ニューヨーク行きの飛行機に乗っている時、同乗していたアントワーヌ・ガリマールを説得して、サド自身が選んだ当時の版画といっしょにサドをプレイアード版で出版させることに成功したのです。その版画は『至高存在に抗するサド』でも見られますよ。二人目がニーチェです。ニーチェにたいするバタイユの尋常ではない情熱は、こんにちでは見つけるのが非常にむずかしい『メモランダム』というタイトルの小さな本の中に特に表わされています。この本にはニーチェからの一連の引用がバタイユによって選ばれているのです。

S. M. :『メモランダム』は『力への意志』という歪曲に対するバタイユ側からの返答です。その歪曲については早くも『アセファル』で告発されていました。しかしこれもまた、道徳の断章を通して、いかにして神秘的状態と政治的な状態が合致するかを見せるひとつのやりかたではないですか？

Ph. S. : これはきわめて政治的な本です。なぜなら当時ニーチェは乱暴なやりかたで独占されたばかりでしたから。その主要な当事者であったのがヒトラーです。彼は民主的に選ばれたのだということを常に思い出しておく必要があります。もしそのことが忘れられている場合には。というのも現実に一度起こったことは、もう一度起こり得るからです。バタイユの政治的立場は非常に重要です。ワーグナーとその大きなスペクタクルとともにニーチェの妹によって演出された「ヒトラー型の」歪曲からなんとしてもニーチェを取り返さねばなりません。バタイユは、進行中の全面的な歪曲、ごく単純に言えばギ・ドゥボールが「スペクタクルの社会」と呼んだもの、にたいする最良の解毒剤です。たとえドゥボール自身はバタイユのことを一度も語っていないにしても。バタイユ以上にスペクタクルの社会に反していたひとは誰もいません。その理由は次の名詞を見れば分かります。ラスコー、マネ、エロティシズム、サド、そしてニーチェなのですから。もしフランス文化というものが、いまや縮小され消滅しつつある書店の本棚以外の場所に存在するとすれば、バタイユはそのなかでは重要な作家です。こうした理由から、バタイユの革命的な側面についてもっとも説得力のあるテキストは『死を前にした歓喜の実践』なのです。なぜならバタイユでなければ、誰がこんなことを言い得たでしょう？　つまり、エロティシズムに取り組むのは、ひとを非常に暗い領域へ引きずり込む何かとしてエロティシズムを考察するということなのです。バタイユの著作のすべてはこのことを証言しています。ひとは死の前で諦めるわけではない。死は歓喜なのです。これで『マダム・エドヴァルダ』に引用されたヘーゲルとともに辿られた道筋がお分かりになるでしょう。非常に変わっていますし、私の見解では、このような次元はこれまでさほど分析されてこなかったと思います。バタイユがブランショに『マダム・エドヴァルダ』の続編を書こうと考えていると言ったとき、ブランショがのけぞりながら答えた言葉を引用したいと思います。「それだけはやめたほうがいい」。なんと奇妙なことでしょう。ブランショにおける、生々しい、単刀直入な、エロティックなテクストは存在しないのです。

S. M. :『マダム・エドヴァルダ』のヘーゲルの引用句についてこのように話をしていると、アレクサンドル・コジェーヴの重要性と、彼のバタイユの思想におよぼした影響を思い出すようわれわれは導かれます。

Ph. S. : コジェーヴについては、ひとはヘーゲルの周りを踊り続けていますね。『精神現象学』に関する講義を受講するために、コジェーヴのもとへバタイユを連れていくのはクノーです。バタイユはその講義に打ちのめされて出てきます。コジェーヴは驚くべき、風変りな人物です。資金密輸の内部で繰り広げられる側面からの取り引きも含めて、そう言われてきたよりもはるかに謎めいた人物です。私はコジェーヴの解釈を読み直しました。ヘーゲルには大変興味があるからです。『精神現象学』は私の内面と深く関わっています。なぜなら『精神現象学』はフランス

革命についての、ただひとつの、ユニークな、直接的な解釈だからです。すこし前に出版されたジャン＝クロード・ミルネールの『革命を読み直す』という本も読み返すべきです。それからマルセル・ゴーシェの『ロベスピエール』も読み直すべきですね。あらゆる観点から見て素晴らしい本です。さて、唯一無二の、つねに模倣されてきたが、決してそれに匹敵するものなどなかったフランス革命を論じながら、コジェーヴは、ヘーゲルがマルクスを生んだと考えます。しかし大きな誤りです。だれもかれもがこれに従いました。というのもマルクス自身が弁証法を足で立たせるつもりだと言っているからです。ここで厄介なのは、たとえ弁証法を足で立たせても、それにはもう頭はないということです。一秒たりともマルクスによって思考されなかったこと、それはごく単純に言うと死です。いつマルクスは死についてあなたに語っていますか？　一度もありません。革命は足で立った弁証法によってそのあらゆる矛盾を解決するだろう。われわれに必要なのは、とマルクスがエンゲルスに言っています、ヘーゲル爺さんなのだ。ヘーゲルは逆さに歩いた。であればわれわれは彼をそのあるべき場に置き直すことにしよう。結局コジェーヴはこのような分析を有効なものと認めています。これは根底的に間違っています。このような分析が、当時の、とても冒険好きなひとびとをすっかり魅了したというのは理解できます。承認されようと欲しているのは、じつは革命の指導者たちの方なのですから。ところでコジェーヴにとって革命はどこで繰り広げられているのでしょう？　ロシアでです。だからといってそれは、いやおそらくこうした理由ゆえにこそ、彼が大掛かりな通貨取り引きの仕切り役となることを妨げはしないでしょう。ですからコジェーヴへの献身は止めにしましょう。むしろヒステリー、死、呪われた部分、すなわちバタイユの定義によると祝祭、無意味な消費といった領域での、バタイユのおこなった内的体験のほうを見ましょう。さて消費とは何でしょう？　もし私生活においてバタイユ的な体験の同志であれば、われわれはコジェーヴのような管理された貨幣の流通回路の中に入っては行きません。国際通貨基金の経営評議会で役員をつとめているバタイユなんてわれわれが目にすることはないのです。

S. M. : 戦後すぐ、大規模な金融の流れが戦争の代理となり得るであろうヨーロッパから、歴史の終わりを考えることは、あの時代を魅了した考えでした。

Ph. S. : なんという考えでしょう。コジェーヴのもっとも驚くべきテクストは『ラテン帝国』と題された、ド・ゴールのための計画書です。ロシア、ドイツといったヨーロッパの北で何かが起こったばかりです。被害は計り知れません。ラテン帝国とは、もしひとがページをめくることに成功すれば、その続きとなる筈のものです。どうしてフランスがそれを行わないわけがあるでしょう？　地中海に接していますしね。しかし明らかにフランスの過去はそれほど栄光に満ちていません。なぜあなたはフランス人にフランス革命について話すことができないのか？　フランス人はヒトラーを有しませんでした。彼らが有したのはペタンです。すなわちことが耄碌した形態です。それでもその後フランス共産党が来ます。この党はうまく切り抜けて世界革命の「フランス性」を隠蔽しました。私はミルネールの本の最後がとても気に入っています。それは「恐怖政治」を強調しつつも次のような結論を述べているからです。「何ものも« 恐怖政治 »を消すことはない。しかし« 恐怖政治 »は人権宣言を消しはしない」。フランス革命、それは人権宣言なのです。この宣言は普遍的です。フランス革命は世界の自由を宣言します。それは、ラカンが言うように述べれば、語る身体の革命なのです。国民公会を前にして、あなたは発言をし、自分の首を賭けるのです。それがテルミドール 9 日に起こったことです。テルミドール 8 日の演説で、なぜあの瞬間、ロベスピエールはみずからの首を賭けているのでしょう。こうしたことすべては、学校教育的なやりかたではない形で解明されることを求めています。これは陶然とさせる瞬間です。なぜならそれは語る身体の普遍的な宣言だからです。発言は止むことがありませんでした。あなたは演説をし続け、自分の首を賭けにさしだしていたのです。ただひとり、バタイユだけがこの巨大な歴史小説に釣り合っているのです。

S. M. : 自分の首を失うことがファシズムにたいする抵抗の重要な徴となるわけですね。彼はその台頭をいち早く予感していました。すでに 1933 年、彼はファシズムの心理について分析しています。そのあとすぐ、バタイユを『コントル・アタック』から『アセファル』へ至らせる前ですが、小説『空の青』が続きます。

Ph. S. : 私は『空の青』を強調したいと思うのです。というのも問題となっている小説は出版にこぎつけるのに20年以上かかっているのですから[7]。素晴らしい本です。かつてフランス語で書かれたものの中でもっとも偉大な小説のひとつです。ラザールとして描かれているシモーヌ・ヴェイユの肖像はもちろん特別な注意に値します。彼女は革命の聖女として描写されています。きわめて興味深いことです。私はクロード・シモンととても親しくしていたのですが、彼はあの当時スペインに武器を護送していた自分の青年時代のことを私に語ってくれたものです。しかしバタイユはそのスペインにいるのです。彼はファシズムの台頭を目撃します。しかし誰もそれが到来しているのを

[7] 『空の青』は執筆されたのは 1935 年だが出版は 1957 年。

見ていなかった。トリーア[8]で（ことが起こるのはそこなのです）、忘れがたい登場人物ダーティとの墓地でのエロチックな場面の真っただ中で、そのことが立証されます。バタイユの女たちは、フィクションの人物も実生活の恋人たちも、みな印象深いですね。彼はヒトラー・ユーゲントの勃興を目にします。彼はやがて起きるであろうすべてを理解するのです。ナチズムの神経、それはすなわちナチス的な厳格さをになった若者たちであり、その数は増える一方でした。つまりエロティシズムはひとを明晰にするのです。要するにこれがこの巨大なフランス人作家について言い得る最良のことです。しかし私は彼はもうそうあるべきようには読まれていないのではないかと懸念しています。

S. M.：結局、ポケット版であれプレイアード版であれ、バタイユはサドと同じくこんにち書店で入手可能であるにもかかわらず、欠けているのは読者だということです。

Ph. S.：ずっと以前から私の気にかかっているのはそのことです。問題はそこにあるのであって、イデオロギーの中にあるわけではないと考えています。もうひとりの呪われたひとハイデガーを引用するなら、こんにちのイデオロギーは彼が「絶対的なジャーナリズム」le journalisme absolu と呼んでいるものに栄華をもたらしていますね。われわれは、抑制と萎縮を強要してくる絶対的なジャーナリズム、絶対的なコマーシャル、通信技術、コミュニケーション、デジタルの時代に生きています。これらは映画と強力なフェミニスト運動によって担われています。私はフェミニスト運動が革命的であるかぎりそれに同意しますが、萎縮や検閲への呼びかけには同意しません。さて、バタイユの男性読者、女性読者はどこにいるのでしょう？　絶えずバタイユが問題となっている私独自の知識体系の中では、それこそが気掛かりのたねなのです。『空の青』は抑圧されたものの筆頭にくるものです。なぜなら、それはやはりスペインに関わることですし、ラザールにおける革命の神秘神学がありますし、ナチズムの台頭を肉体がそう知らせるようにあるがままに見るエロティックな明晰さがあるからです。

S. M.：ミシェル・レリスは『空の青』を見事な本だと看做していました。『空の青』はまさにその政治的な射程によって、同時代の文学的な生産をはるかに凌駕しています。

Ph. S.：ミシェル・レリスはその分野では並外れた人物でした。レリスの家にいる私自身の姿を思い出します。彼が住んでいたのは河岸に沿ったどこかで、バタイユの遺言執行人だったからです。その死のすこし前、バタイユはわれわれの雑誌『テル・ケル』誌のために「非・知についての講演」と題するテクストを手渡していました。午後になると彼は『テル・ケル』の事務所に来て、片隅に座り、何も言わなかったものです。無言の彼の存在は本当に心揺さぶられるものでした。そのあと私はガリマール社でのカクテル・パーティーにバタイユの供をしたのです。その場では誰もバタイユに近づこうとも触れようともしません。まるで彼に毒が塗られているかのようでした。とても奇妙なことだと私は思ったものです。さて、われわれは、われわれの雑誌のためにバタイユがくれたテクスト「非・知についての講演」を出版したかったものですから、レリスの家に私がいたというのは、レリスにその許可を求めるためだったのです。レリスは何の問題もなく許可を与えてくれました。

S. M.：その出版以来、『テル・ケル』はバタイユを巡る重要な編集・出版の仕事に取り掛かります。その仕事は非・知の徴のもとに置かれ、雑誌『ランフィニ』まで続けられます。

Ph. S.：一方の雑誌から他方の雑誌にバタイユはつねにいます。非・知とともにひとは大いなる笑い le rire majeur と卑小な笑い le rire mineur に触れます。笑いはバタイユにおいてとても重要です。ニーチェです。しかし反・哲学のニーチェです。思い出されるのはバタイユにきわめて敵対的だったひとりの哲学者です。なぜあれほどの敵意があったのか？　ジル・ドゥルーズのことです。彼はバタイユの「司祭」的な側面が好きではなかった。ですが初期のドゥルーズの本は非常に良い。ニーチェの本の隣にプルーストの本が見出せます。しかしバタイユは受け入れられなかった。ドゥルーズはバタイユを奇妙な立場に置いていました。バタイユと哲学者たちとの関係を考えるとき、これは徴候的な事例です。いつ哲学者は陶酔するのでしょう？　それが問題なのです。いかにバタイユは議論を自分の有利に押しすすめていくか、そしていかに皆が恐怖におびえるかを見るには、雑誌『生ける神』誌における罪に関する討論[9]に戻ってみるだけで充分です。途方もないものです。サルトルは、反バタイユのジュネといったところでした。バタイユの方はサルトルを完璧に理解し、答えていました。まあ、あの時代に留まり続けるのはやめましょう。こんにちでは哲学者はイデオローグかジャーナリストになってしまいました。ですから彼らには波乱万丈で冒険にみちた生活はもうないのです。

S. M.：雑誌『クリティック』のバタイユ追悼号にあなたは「言語の偉大な不規則性」と題されたテクストを発表

[8] カール・マルクスの生誕の地。

[9] 「討論　罪について」恒川邦夫訳、『バタイユの世界』op.cit. pp.511-572 を参照せよ。

しています。それはバタイユのエクリチュールに固有の運動に言及しています。この運動が言語の只中においてそのエクリチュールを体験としてもリズムとしてもユニークなものにしている、と。

Ph. S. : あの時代のわれわれにとって言語は本質的な何かでした。不規則性というのは到達不可能ではあるが触れることはできるある点にたどり着こうと努める思考を想起させるのです。それから数年後、私が企画したアルトー・バタイユのコロック [10]をとりあげてごらんになれば、われわれはそれを「文化革命へ向けて」と呼んでいたことがお分かりになるでしょう。それは失敗でした。しかし同時にとても首尾よくいったのです。ある観点から見ればわたしたちは挫折しています。壁が立ちはだかっていたのです。わたしたちはそれを指で指し示しました。壁とはフランス革命のことです。いまから 20 年以上も前に『ル・モンド』紙に掲載された私の論説「黴の生えたフランス」にたいして、よくぞ言ったという祝辞をいまでもたまに受け取ります。しかしまだあの頃はいい時代でした。いまや、あなたは流動化したフランスの中にいます。かつては、名指しできる、記述可能な敵がいるような気がした時期がまだあったのです。つまりプチ・ブルジョワのことです。こうなると、酔えるなら壜なんかどうでもいい、となります。ボードレールのようにバタイユもこう言うでしょう、「酔ってい給え」と。しかしある共同体の企画のためにバタイユと「一緒にまとまる」というのは滑稽に思えます。リアリストでい給え、そして不可能なものを求め給え。唯一の可能性は「コントル・アタック」という名を持ちます。私は、完全に敗北し、すこし熟考しなければならなかったときに、これを一冊の本のタイトルにしました。

S. M. :『テル・ケル』から『ランフィニ』に移行して購読者も変わります。バタイユの『全集』も漸次出版され、バタイユは前よりもすこしずつ読まれるようになります。ところが彼は、あなたのおっしゃるような孤独に陥っていた。

Ph. S. :『有罪者』を読み直すべきです。あのような本がどこで思考され、書かれたのか。ヴェズレーでだったと思います。なんと興味深い本でしょう、『有罪者』は。まったく見事なテクストです。あの時代に書かれた彼のすべての覚書、手紙ですら、感嘆に値します。完全にわが身に引き受けられた孤独。彼はひとりぼっちです。そして道理があるのは彼のほうなのです。これは、道理のあるひとびとにはよくあることです。彼らはひとりきりです。

S. M. : そのような孤独の中で、自分の雑誌を奪われ、終戦のさいに彼が救った場ではほとんどよそ者扱いされてしまうバタイユをあなたは描いておられます。あなたはさらに当時まだシュールレアリスト運動に囲まれていたブルトンをバタイユと対立させます。ところがあなたは、カフェ「プレ・オ・クレール」で、彼らが近いうちに再会しようと約束しながら握手する場面を思い出してもいますよね。このような出会いからどんなことが期待できたのでしょう？

Ph. S. :「ラ・プロムナード・ド・ヴェニュス」[11]ではですね.....。あれは驚くべき時代でした。アンドレ・ブルトンは通りでひとりの女性のあとを追っていたのです。そのとき彼は、われわれがジョルジュ・バタイユと一緒にいたカフェに入ってくるのです。バタイユはとても穏やかな声で、「明らかに賢明さにおいてブランショ以上に遠くへ行くことはむずかしいですよ」と言っていました。それはこっそり耳打ちされた、明らかな批判でした。つねにとても静かでしたよ、バタイユは。『テル・ケル』のオフィスで非常に緩やかな抑揚で、「私は高校では獣と呼ばれていたんです」と言ったことがあります。このような注意をうながすひと言がとても印象的でした。非常に落ち着いていたバタイユの内には極端な暴力が存在していましたからね。さて、そのときにですね、「ここに入ってきたのはアンドレ・ブルトンではないですか？」と彼は言うのです。私はブルトンに挨拶しに行きます。すると彼は「おや、ジョルジュ・バタイユですね」とはっきり言います。ブルトンは立ち上がり、バタイユに挨拶しに来るのです。彼らは歴史的な握手をかわします。その場で私は、自分はこの究極の出会いを記録するためにここにいるのだ、とみずからに「小説的に」物語っていました。いずれにしてもそれは私の目の前で起こったのです。その数週間後、バタイユは亡くなるのですが.....。さてその後、バタイユは「プレ・オ・クレール」をすこし迷ったようなそぶりを見せながら出ていきました。しかし彼は戻ってきます。道を間違えたところだったのです。その直前、彼は私にこう言ったばかりなのでした。「いいですか、悪夢をおもしろいと思い始めたら、それは悪いしるしです」。バタイユは最後まで明晰なままでした。死の間際での、あの二人の人物の握手は、ただもう崇高です。非常に強烈な瞬間でした。

S. M. :『神秘のモーツァルト』であなたは、ドン・ジョヴァンニはバタイユの生涯とエクリチュールによく現れる人物だと言及しておられます。ドン・ジョヴァンニは『眼球譚』にも見出せます。その中心人物たちがドン・ジ

[10] Le Colloque de Cerisy : « Artaud / Bataille » (Vers une révolution culturelle) (jeuillet 1972) organisé par le groupe *Tel Quel*.

[11] 当時のシュールレアリストたちが集まっていたカフェらしいが定かではない。

ョヴァンニの館へおもむき、その墓のうえで笑うときです。あるいはアンドレ・マソンとスペインで、オペラを背景としてアセファルという男を思いつくときにですね。

Ph. S.：悔い改めて騎士分団長に従うなんてまっぴらだ、と。バタイユはとても強く、とても繊細な耳を持っています。ですから確かにモーツァルトとドン・ジョヴァンニは彼にとって非常に重要でした。「思いあがった老いぼれめ！――悔い改めよ――いやだ――はいと言え――いやだ！」。死の瀬戸際における見事なまでの反抗が問題となっています。バタイユの小説たとえば『空の青』などがわれわれに語っているのはそうした野蛮な事実なのです。

S. M.：野蛮な事実あるいは「事実の野蛮性」といえば、ミシェル・レリスのフランシス・ベーコンに関する小さな本のタイトルを思い出させます。『フランシス・ベーコンのパッション』であなたは、ポン・ロワイヤル・ホテル[12]のバーで画家と会っていたミシェル・レリスに言及されていますね。そのあとあなたが三番目の会食者として持ち出されたのが「ジョルジュ・バタイユの透明で、静かな、超然として、焼け焦げた亡霊だった。ベーコンの絵画はぼくにしばしば彼のことを考えさせる」。バタイユ自身も『エロスの涙』でベーコンの絵画の「粗暴な」性格に触れています。他方でベーコン自身も『内的体験』の読者でした（彼の持っていた『内的体験』はポンピドゥー・センターでの「ベーコンを包み隠さず」展で展示されていました。その隣にはミシェル・レリスの『成熟の年齢』、アイスキュロスの『オレステイア』がありました）。フランシス・ベーコンのそれのような絵画にアプローチするには、転覆的な内的体験を経ずには不可能なのでは？

Ph. S.：ベーコンの絵画からホモセクシュアルな側面を取り除いてしまうと、彼のインスピレーションの源のひとつを取り除くことになります。しかしバタイユにはそうした次元は存在しません。ミシェル・レリスは友人のベーコンにとても寛大でした。ポン・ロワイヤル・ホテルで彼らが膝をつきあわせて話し合っているのを私は目撃しました。深い友情でした。ブランショのバタイユにたいする友情についてはたくさんの注釈が書かれましたが、バタイユは、それが誰であれ、誰とも親密にはなりませんでした。集団もなければ、あり得べきグループもなく、いわんや友情などもありません。彼は暗い歴史の中にいたのです。私の考えでは、バタイユは、ベーコンの絵画をレリスがそのあと知ったほどには知らなかったと思います。本物は見ていなかったでしょう。それからベーコンが、特にアイスキュロスにおいて言わんとしていることを知るには、ほんの少しギリシア悲劇に馴染んでいるだけで充分です。ところでバタイユの『オレステイア』は、詩にたいする憎しみであり、それが『不可能なもの』となるわけです。ここにたまたまバタイユとベーコンの一致点があるのですが、それを把握するには雄渾なギリシア悲劇を知っていなければなりません。それを強く感受することができなければなりません。

S. M.：あなたがたびたび取り上げられるもうひとりの画家はピカソです。バタイユにとってもピカソはおそらくゴヤとともに偉大なスペインの画家だったのでは？

Ph. S.：ヴェラスケスを忘れてはいけません。ピカソはヴェラスケスにじっくり取り組んだのです。マネはヴェラスケスのうちにおのれの黒を発見しました。同様にバタイユの『マネ』を読み直すべきです。驚くべきテクストです。スキャンダルとなるのはマネの至高の無関心なのです。『オランピア』を見てごらんなさい。そこに完璧に無関心な娼婦がいます。この絵はあらゆるひとびとに衝撃を与えました。黒がスペインから来たとしても、肉体の色彩を感じさせるマネの黒というものが存在するのです。マネはボナパルト通り5番地で生まれたブルジョワのフランス人です。奇妙な、すなわち革命的なブルジョワです。特赦の際の彼の政治的立場を思ってみてください。バタイユはマネのこの極端な超然さがどれほど革命的であるか理解していたのです。革命的なブルジョワ、それはあり得るのです。マルクス自身がそうです（笑い）.....。

ステファヌ・マソネによって進行された対談
ガリマール社のフィリップ・ソレルスのオフィスにて
2020年3月11日

おわりに

ソレルスがこの対談でどのようにバタイユを理解しているかをまとめてみたいと思う。バタイユのすべての著作が証しているのは「死を前にした歓喜の実践」なのだとソレルスは明言する。バタイユはつねに死を前にしている。エロティシズム、女のヒステリーも、ソレルスによれば死に通じるもの、あるいは死が別のすがたであらわれたものである。バタイユは死の前で諦めたりはしない。むしろ彼は死の前で歓喜の実践を可能なかぎり続けるのである。このような文脈において『マダム・エドヴァルダ』の冒頭に掲げられたヘーゲルの『精神現象学』からの引用「死はこの世にあるもののうちでもっとも恐ろしいものである。死の仕事を維持するのはもっとも大きな力を要求するものである」は理解されるべきなのだ。バタイユはたんにエロ

[12] マソネは原文では Port-Royal と言い、ソレルスもそれに引きずられて Port-Royal と発言しているが、ソレルスの *Les passions de Francis Bacon* には Pont-Royal とあるので「ポン・ロワイヤル」と訳しておく。

ティシズムに耽溺しているわけではない。彼はエロティシズムやヒステリーの発作の体験を通して「死の仕事を維持」しているのだと考えられる。

ところでソレルスによればヘーゲルの『精神現象学』はフランス革命についての唯一無二の解釈の書である。従って「死はこの世にあるもののうちでもっとも恐ろしいものである。死の仕事を維持するのはもっとも大きな力を要求するものである」という言葉はフランス革命についてのひとつの解釈として読まれるべきなのだ。だが「死の仕事を維持する」とは具体的にはフランス革命の何を指しているのか？　ソレルスが示唆しているのは恐怖政治、ロベスピエール、テルミドール 9 日だ。国民公会時代、ロベスピエールは公安委員会の委員長としてジロンド派の粛清、盟友デムーラン、ダントンの処刑、反革命容疑者の処刑を次々と断行する。この間ロベスピエールは何度も体調を崩し、公安委員会を長期欠席している。が、彼はジャコバン・クラブでの演説はやめない。テルミドール 8 日には国民公会で演説する。逮捕後のテルミドール 9 日にも彼はパリ市役所に立てこもり、国民衛兵に蜂起を呼びかける。ソレルスによれば、このようなロベスピエールは、死を賭けた、語る身体の普遍的宣言をおこなっているのである。つまり「死を前にした歓喜の実践」をロベスピエールは行っているのである。ところでフランス革命のこのような「死の仕事」の維持に匹敵するのがバタイユのエロティシズムの、ヒステリーの、内的体験なのだ、とソレルスは断言する。つまり、バタイユのエロティシズムは好事家の惑溺どころではなく、ある意味で死の仕事を維持する「革命的な」(「フランス革命的な」と言い換えられるかもしれない）ものなのだ、とソレルスは解釈するのである。

しかしながら「革命」というひと言を発するだけで複雑な問題が生じてくる。バタイユの生きていた当時、革命と言えばロシア革命を指すことになる。ロシア革命のイデオローグ、アレクサンドル・コジェーヴはこの時期パリでヘーゲルの『精神現象学』の講義をしていた。コジェーヴはソレルスとは違い、『精神現象学』はマルクスを準備するものとして解釈する。ヘーゲルの弁証法は転倒していた。マルクスは転倒していた弁証法の足を地につけることによって革命を遂行しようとする。おそらくこのことが言わんとしているのは、意識の変革によって世界を変えるのではなく、経済的な下部構造の必然的な発展によって旧来の生産関係が否定され、そのことによって上部構造も否定され、あらたな上部構造が構築されるということだろう。マルクス・レーニン主義の革命はこのような段階を踏んでなされる。バタイユはこのような講義を聞いて打ちのめされる。しかしソレルスはコジェーヴのこのような『精神現象学』解釈は根本的に間違っていると言う。まず足で立った弁証法には「頭」がない。つまり明確な上部構造のヴィジョンがない、ということだろう。またマルクス自身、革命の弁証法によって引き起こされる「死」のことを一度も考えていない。ゆえにソレルスによれば、『精神現象学』はマルクス主義を準備するものでもなく、ロシア革命を成就するための前提ともなりえないのだ。あくまでもそれはフランス革命の注釈書なのである。

バタイユはアンドレ・ブルトンとおなじくソビエト主導の革命論には距離をおくようになる（しかしアラゴンはそれに邁進するであろう）。しかしながら一方でバタイユは誰よりも早くファシズム、ナチズムの台頭を体感し、それが将来もたらすであろうものを予見する。その不気味な台頭が描かれているのが 1935 年に執筆された『空の青』でのヒトラー・ユーゲントの描写である。エロティシズムはひとを明晰にするとソレルスは言う。ファシズムに抗してバタイユが起こす行動は、まずニーチェをヒトラーのプロパガンダから取り戻すことであった。ニーチェの思想はナチスの思想の先駆的形態であるという、ニーチェの妹エリーザベトとヒトラーが演じた茶番を夙にバタイユは批判する。そしてブルトンとともに「コントル・アタック」を始める（長くは続かないが）。続いてギロチンで首を落としたロベスピエールばりに「アセファル」（無頭人）をファシズムに対置するのである。

ソレルスは、反ファシズムのバタイユの姿勢は第二次世界大戦前のモーリス・ブランショの政治的立場とは根本的に異なると述べている。後年、バタイユとブランショの間での友情が多く論じられることになるが、ソレルスはバタイユとブランショの間にそれほどの親密さがあったのか疑問を呈している。確かに「死」はバタイユとブランショに共通する大きな要素だ。死という不可能なものに可能なかぎり接近しようとするブランショのエクリチュールはバタイユ的であると言える。しかしブランショには生々しいエロスが決定的に欠けている。それにバタイユは誰とも親密な関係にはなかった、とソレルスは言う。徹底的に引き受けられたバタイユの孤独は第二次世界大戦中に書かれた『有罪者』に明らかだとも言う。また彼の目撃したバタイユはつねに寡黙で落ち着いていたが、孤立していたのだった。

ソレルスと「テル・ケル」グループは 1972 年 7 月にスリジー・ラ・サールで「アルトー・バタイユ、文化革命へ向けて」と銘打たれたコロックを開催する。この時期ソレルスはフランス共産党やソ連の指導部と断絶し、毛沢東主義者となって路線を変えていた。「文化革命」という語はその辺の事情をよく物語る符牒となっている。ソレルスによればバタイユは「革命的」であったが、それはフランス革命的であったのであって、ロシア革命的ではなかった、というのは前に見たところである。おそらくソレルスはバタイユをフランスやソ連の共産党の革命路線とは違う「革命的なもの」として顕揚しようとしたのかもしれない。しかし本人もこれは失敗だったとあっさり認めている。

だがこのコロックで彼はもうひとつ別の勇み足をしている。彼はサルトルを攻撃するだけでなく、バタイユをアンドレ・ブルトンと対立させ、ブルトンに厳しくあたったのである。もともとはブルトンが 1930 年の『シュールレアリズム第二宣言』でバタイユを攻撃したことが発端となっている。この対談では対話の相手マソネが、ソレルスがバタイユをブルトンと対立させたことに軽く触れているだけで、ソレルスはブルトンへの批判についてはまったく答えていない。ただバタイユとブルトンとの「プレ・オ・クレール」での歴史的な握手を感動的に語っているだけである。

実を言うとソレルスは、この対談以前の 1999 年、雑誌『レ・タン・モデルヌ』誌上に「バタイユの孤独」という論説を発表しており、その際、1972 年のスリジー・ラ・サールで「テル・ケル」グループがブルトンに対立的であったことを訂正したいと述べているのだ。以下がその引用である。「われわれが『テル・ケル』で行ったこと、それはバタイユならびにアルトーの奔出の試みであり、スリジーで絶頂をむかえますが、その場でサルトルに対する批判（それは実際に言うまでもないことでした）だけでなく、ブルトンに対しても批判が表明されたことにたいして、こんにち私は修正あるいは訂正をしたいのです。あれらの批判は行き過ぎであった、そして当時の視点よりもずっと苛立っていない視点からブルトンの作品を《日付とともに》再考すべきであろう、と言いたいのです。サルトルの問題とはポエジの問題、すなわちボードレール、マラルメ、フローベール、ジュネに関する問題です。ポエジに関してサルトルには何か言うべきことがあるでしょうか？　ほとんどありません。あるいは社会学的には正当でも不適切なことだけです。一方ブルトンにはポエジに関してどんな言うべきことがあるでしょう？　彼がポエジの証人の立場に身を置き、見事な頑固さでこの問題について口を割らないかぎり、彼にはたくさんの言うべきことがあるのです。こういうわけで、1968 年のあと、アラゴンとブルトンの死後の和解という恒例の儀式が催された時、われわれは、このような陥穽を免れようと努めながら身体についてのバタイユ的な観点からそうした和解に反対したのです。これはもっとも重要性の高い問題です。つまり、言語やポエジの用い方やそれらについての思考に関わるだけでなく、政治的な問題でもあるからです。という訳でこんにち私はブルトンの行為にある種の深い賛同の意を繰り返し表明したい気持ちに駆られているのです。その理由は次に述べる通りです。思うのですが、スターリン主義の歴史は書かれるべきですけれども、いまだ真に着手されてすらいません。このような観点からするとブルトンは重要な証人だと思います（バタイユもですが、また別様にです）。たとえば彼の『野をひらく鍵』を読み直すべきです。その本でブルトンは、ほとんど完全な孤独の中にいながら、社会主義レアリズムに抗してシュールレアリスト的な体験を擁護し、『反抗的人間』におけるロートレアモン解釈が皮相的だと判断してカミュを攻撃し、サルトルの『ボードレール』は勝負の手前にあると言い、アラゴンとその見世物的な理想化を攻撃することを止めず、「現行犯」という見事なテクストで 1949 年の極めて重要な瞬間の歴史的な記述を行っています。そのとき贋作のランボーが出回るのですが、彼は問題となっている詩は贋作だと当時一番最初に言うのです。とても勇敢に彼はその立場を守り続けます。

バタイユにたいするブルトンの姿勢は、私が先ほどの逸話で示した通り、1930 年の『第二宣言』で彼が言ったことの訂正となっているのです。戦後、彼は宣言に戻り、こう言います。新たな神話を練り上げるにはバタイユから多くを期待すべきである、と。そして私がお伝えしたあの握手はうわべだけのものでは全くなかったのです。ですから私は歪曲の対象となっているこの二つの名前を歪曲から守るために、もう一度結び付けたいと思います。私たちはこの二つの視点を切り離すことはできないのです。アルトーもおなじく切り離せません。これに関連して、政治的活動に関する思想の大スターたちも、かつてなされた以上に批判的なやりかたで再考されるべきです」[13]。

アラゴンは共産党の党員としてソ連と密接な関係をむすび、シュールレアリズムとは決別していた人物であり、スターリン粛清の時代にもスターリンを正当化していた。当時ソ連の共産党を批判していたソレルスにとって、ブルトンのアラゴンとの和解は許しがたいものだったのだろう。だがソレルスは性急にすぎたと言うべきである。アラゴンとの「死後」の和解？　ブルトンに何の責任があるのだろう？　しかも「コントル・アタック」以後、ブルトンとバタイユはすでに和解していたのだ。

この対談で圧巻なのは、ソレルスがバタイユにおけるエロティシズムと死を、ヘーゲルを介してフランス革命に結びつけているところであろう。性的な快楽の追求と、死の仕事の維持を、語り続ける革命家の身体と関係づけることは、通常の文学の研究家には思いもよらないことであると思われる。ソレルスが言うにはバタイユは「革命的」である。いいだろう。だがその革命はフランス革命を指すわけである。ところでソレルスは対談中フランス革命が壁となったと発言している。フランス人はヘーゲルほどにもフランス革命を思考してこなかった。フランス革命を行うこととフランス革命を思索することは別だと言い、フランス革命を徹底的に思考してこなかったことが現代のフランス人の分断を生んでいると言う。どういうことか？　たとえばロベスピエールの評価である。ソレルスが挙げているマルセル・ゴーシェの『ロベスピエール』にはこうある。「89 年の諸原理にたいする一般的な同意は、それにもかかわらず分断を消し去ったわけではない。逆説的なことに、自由と平等の原則にたいする一層強められた同意は、結果

[13] Philippe Sollers, « Solitude de Bataille », dans *Les Temps Modernes*, nº602, 1998-1999, pp.247-248.

として極端な手段にたいする反発を強調することになってしまった。そしてロベスピエールの名前はそうした極端さに結びついたままなのである。ついに確立された合法的でリベラルで平和な共和国は、ギロチン、公安、クー・デタ、恐怖政治を嫌悪する。ロベスピエールは多数派のコンセンサスから見れば社会から拒絶されたままだ。公式の記憶は彼を認めることを嫌がっている。だからといって一群の支持者がいることの妨げにはならないし、状況は彼らにおろそかにすべきでない支持を与えている。というのも共和国のコンセンサスは人権に中心的な場を再び与えているのだが、ロベスピエールは弁護士たちのうちでもっとも熱烈な、もっとも厳密な、もっとも断固とした人権の弁護士だったからだ」[14] 。ロベスピエールの評価は現代でもフランス人をもっとも分断しているとゴーシェは言う。一方には恐怖政治、ギロチン、公安委員会に結びついたロベスピエールがいる。他方には 89 年の「人権宣言」を最後まで守り通した原理・原則のひと、「清廉の士」ロベスピエールがいる。このようなロベスピエールについての評価がフランス人に分断をもたらしているわけである。だとすると、バタイユが革命的、フランス革命的であるとしても、フランス人のロベスピエール評価に分断があるように、バタイユ評価にも分断があるということなのだろうか？ 1972 年の「アルトー・バタイユ、文化革命へ向けて」が失敗に終わったのはフランス革命という壁があったからだとソレルスは発言しているが、バタイユの革命性を顕揚しようとしても、フランス革命の理解がフランス人のあいだで共通ではなく分断されたものであったために、その革命性は認められなかった、ということなのだろうか？　もしそうだとすれば、どこにバタイユの読者がいるのかというソレルスの懸念も、ロベスピエールがこんにちでも嫌悪されつづけている事実と関連づけて考えられるべきなのかもしれない。バタイユのエロティシズム、呪われた部分、恍惚、供犠、笑いの理論は、一部のものからはロベスピエールの極端さと同じように嫌悪されているのであろうか？

参考文献

1) *L'infini*, nº147, Printemps 2021.
2) *Les Temps Modernes*, nº602, 1998-1999.
3) 清水徹・出口裕弘編『バタイユの世界』青土社、1991 年。
4) Philippe Sollers, *Les passions de Francis Bacon*, Gallimard, 1996.
5) Marcel Gauchet, *Robespierre*, Gallimard, 2018.

[14] Marcel Gauchet, *Robespierre*, Gallimard, 2018, p.10.

バタイユ、ひとりきりの

——フィリップ・ソレルスとジョルジュ・バタイユ——

小山尚之*

(*東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

要旨： 本稿は 2021 年春号の『ランフィニ』誌第 147 号に掲載された「バタイユ、ひとりきりの：雑誌『ウーロップ』誌のステファヌ・マソネとフィリップ・ソレルスとの対談」を翻訳しそれにコメントを付したものである。ソレルスによればバタイユのあらゆる著作、そのエロティシズム、死、供犠、笑い、消費の理論も含めて、それらは「死を前にした歓喜の実践」を証している。ソレルスはバタイユの思想にたいするコジェーヴやブランショの影響を否定的に評価している。というのも第二次世界大戦前バタイユはアンチ・ファシスト、アンチ・全体主義者であったからである。ヘーゲルがフランス革命を「死の仕事の維持」と形容したのが正当だとすれば、バタイユの書き物も「死の仕事の維持」であり、革命的と形容し得るだろう。ソレルスはバタイユ最後の年にバタイユとブルトンが交わした握手を感動的に語っている。

キーワード: フィリップ・ソレルス、ジョルジュ・バタイユ、ヘーゲル